

第2回運営指導委員会協議議事録

(浜本委員) AIへの関心が高くないのはどうしてだと思うか

(津川) 具体的に社会でどのように使われているかがイメージが湧いていないのではないか。また、「自分には関係ない」と考えている生徒が一定数いることも考えられる。

(浜本委員) 社会において、「AIにできること」「AIにできないこと」は非常に切実な問題。自分たちの存在価値があるのか、ないのかという問題に繋がってくる。目の前でAIを活用することには興味がないかも知れないが、将来の自分の存在価値と関連づければ関心が高まるのではないか。あと、Sコース卒業生の意識調査はとてもおもしろい。155名から回答があったようだが、その回答率はどの程度か。

(津川) アンケートの依頼は、各学年の代表生徒にお願いし、ラインなどで共有してもらった。そのため、どの程度の卒業生にアンケートが行き渡ったかは不明である。ほぼ全員に行き渡っているなら約50%程度。

(浜本委員) 回答率を高める工夫は。

(津川) 得られたデータのフィードバックやお礼など。ネガティブな意見も含めて回答数は上げたいので、今後は、質問数を減らしたり学年を絞るなどしたい。

(浜本委員) 特に興味を持った項目は「他者と協働する力」。1人でできることもあるが、多くのことは人と協力してやり遂げる。一方、「自分の仕事はここまで」「自分の意見が相手に伝わっているかどうかは関係ない」など協力することが苦手な人もいる。また、意思の疎通が難しい海外の人とのプロジェクトでも、この素養は極めて重要。高校性の時代で身につける力として「他者と協働する力」は価値がある。

(川原委員) 公開授業は大変魅力的な授業で、非常におもしろかった。

(勢井委員) 卒業生意識調査は興味深い。コロナ禍で授業がオンラインになり、スモールグループでのディスカッションなどができず、「協働性」が養成できなかった。卒業生意識調査で「役に立ったと思われるSSH事業」で探究科学I・IIが122名と特に高い。グループで取り組む重要性を改めて感じた。また、客観的な評価にするため、難しいと思うが大学側の評価も加えたらどうか。SSH校と非SSH校の差など。ぜひ協力したい。あと、重回帰分析まで行う授業は大変参考になった。演習的に取り組む方がデータサイエンスは実感として伝わることをリアルに感じた。

(渡部委員) Sw-ingSLCの変容は毎年調査しているか。また、1年次は6月2.68、12月3.51とスコアが上がっているが、2年生6月は2.69に下がっているのはなぜか。

(津川) 毎年調査している。2年生の数値の減少は、メタ認知が上がったことが作用したと考えられる。また、SW-ingSLCの項目は毎年少しずつ改変しているので、継続的な数値にはなっていない。

(常見委員) データサイエンスの公開授業は短い時間でまとまっていたとてもよかった。大学でも活用できる。また、SSHの探究活動でデータサイエンスはおもしろいのではないか。例えば、ファミリーレストランのサイゼリアはデータ分析で料理を決めている。実データを使った探究活動ができるのではないか。

(宮本委員) 高校時代にデータサイエンスの知識を身につけておくことは、大学や就職したときに極めて有効。あと、卒業生意識調査で起業の意思について調査しているが、SSHとして起業の意欲を育てることが目的なのか。

(津川) 決して起業意欲を育てることが目的ではない。「社会に貢献しよう」などの意欲や、起業するほどのバイタリティーの有無などの確認が質問の意図。

(宮本委員) あと、卒業生意識調査に働く場所についての項目があるが、これは現在の居住地の影響を受けるのではないか。そのようなデータはあるのか。

(津川) データはとっていない。ただ、大学生の多くは県外と思われる。居住地の質問項目を加えることも検討したい。

(早藤委員) 卒業生の追跡調査はとても評価できる。ジュニアドクター育成塾の協議会

があったが、小中学生の追跡調査は難しいと全国の実施機関でも話題になっていた。Google フォームへのアクセスの形態はどうなっているのか。

(津川) スマートフォンを活用している。

(早藤委員) 調査の内容も大事だが、卒業後大学でどのように活躍しているかも重要。大学でどのような状況なのかも質問に加えたらどうか。あと、教材を HP で公開していることは評価できる。ぜひ県内の高校で活用の幅が広がって欲しい。気になる点として、教員アンケートで「SW-ingSLC と各教科のつながりが明確になるとよい。」とあったが、現状の SW-ingSLC の設定と各教科のリンクはどうなっているのか。

(津川) SW-ingSLC の項目は完全に各教科とリンクしていないのが現状。探究活動をターゲットにした SW-ingSLC の方向性は維持しつつ、引き続き教員研修などを通して項目を検討したい。

(浜本委員) ICT を活用した連携システムの構築が目的にあるが、コロナ禍においては過去の目標になりつつある。ICT は使って当たり前で、むしろどう活用するかに工夫の余地がある。他の都道府県の SSH 校との交流はどうか。

(助道指導主事) 他の都道府県の SSH 校との交流は管理機関としても検討する。

(渡部委員) 卒業生の意識調査で、回答者の半分以上が課題研究の指導や講演会の実施などを実施してもいいと回答している。母校の先輩が話をしてくれれば生徒の意欲は高まる。具体的に SSH の卒業生の講演などを企画しているか。

(津川) H24 年度卒業生にお願いしてもあと 5～6 年はかかる。今年度の 2 回の SW-ing アカデミーはすべて本校の卒業生 (H7 年度卒・H9 年度卒) に講師を依頼したが、生徒の評価は高かった。ぜひ卒業生に協力してもらって環境を整えたい。

(渡部委員) オンラインを使えばわざわざ来てもらう必要がない。活用して欲しい。

(勢井委員) 教員アンケートについて。目標設定と振り返りに関して教員のトーンが低い。私自身、最初に目標を設定させて、中間的にフィードバックをかけながら最終的に振り返りをさせる形にシフトしている。ただ、文献などを読むと、振り返りについてはネガティブな評価もある。また、学生には答えだけ振り返って、自分の学習の姿勢などのプロセスを振り返らない生徒が多く課題と考えている。目標設定と振り返りに関して教員のトーンが低い原因は何か。

(津川) 振り返りを取り入れることは、今までの授業スタイルになかったので難しいことが原因の 1 つ。一方的に終わってしまうところがある。生徒自身の振り返りが大切であると教職員研修で周知していきたい。

(常見委員) SSH の生徒意識調査アンケートを、今回の授業のような回帰分析をしたらおもしろいデータが出るのではないかな。ひょっとするとマイナスの係数がでてくるかもしれない。

(川原委員) 活動は十分魅力的だと思う。ただ、今後は発信力が重要になる。生徒のプライバシーもあるが、上手に発信していくべき。例えば、Youtube などでコンテンツを作って発信し、それに対する SNS などのリアクションを受け、より魅力的なコンテンツとして発信するなど。東京大学の推薦入試で合格した生徒は高確率で Twitter をしている。やはり、活動が際立っている生徒は SNS を上手に活用して発信している。「発信力を鍛える」も課題に加えたらどうか。

(常見委員) 徳島県の高等学校では生徒向けのタブレット端末は全員に配布されるか。

(助道指導主事) GIGA スクール構想として、R2 年度末までに全ての高校生にタブレットが 1 人 1 台配布される。

(常見委員) 教材の準備はどうなっているのか。

(助道指導主事) 徳島県の取り組みを説明すると、R2 年度に 2 校を指定して研究を進めている。また、指導主事が学校に赴いて研修等を実施する予定であり、タブレットは R3 年 4 月当初から活用できると考えている。

(板東教頭) 今回の研究授業は、今までなら CAI 教室でしかできなかった。今後、生徒一人が端末を持つようになればこのような授業が展開できる。そういう意味でも、今回

の授業は先進的であった。また、7月の公開授業では、現代社会の授業において、各グループでiPadを活用し意見をまとめ、教員の端末で集計や提示を行った。これからのスタンダードになると考える。生徒も、探究活動の成果をまとめる際などで大いに活用することが予想される。引き続き、授業研究の中で使い方を教員間で共有していきたい。

(常見委員) 以前、ロイロノートを活用している授業を観て衝撃を受けた。ロイロノートに限らずだが、このような時代がきたとわくわくしている。引き続き研究開発を進めて欲しい。

(助道指導主事) 徳島県ではメタモジを活用する方向。

(常見委員) タブレットのOSは何か。

(板東教頭) Windowsになる。

○校長お礼

おわり